
その旋律に染めて

黒鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その旋律に染めて

【Nコード】

N1036B

【作者名】

黒鷹

【あらすじ】

男子校で鳴り響いたピアノの音色。それに惹かれて辿り着いた音楽室には、いつもと全然違う委員長がいて――。

プロローグ（前書き）

この作品には、ボーイズラブの要素が多少含まれています。如何わしいところまでは行かないので、ご安心ください。

プロローグ

・・・・・・・・

「あ……ピアノ？」

放課後、僕は珍しくピアノの音色を聞いた。

一音も間違っことなく見事に弾かれている鍵盤。

僕は、思わずぼーっと聞き入ってしまった。

ここは、男子校。

美しい音色なんて、中学校の時以来だ。

そういう僕も、実はフルートをやっていたりするんだけど。

気がつくと僕は、ピアノが聞こえる音楽室の前に立ち尽くしていた。そーっと中をのぞくと、一生徒がピアノを叩いていた。

「誰……?」

タイの色からして、僕と同じ2年生である事は確かだけど、誰だろう。

3組までしかないから、全員憶えていると思ったんだけど……。
ううん、と僕が頭を抱えていると、ガチャッと扉が開いた。

「山下……? どうして、ここに……」

「え?なんで……僕の名前……」

すると、その人は急いで眼鏡をかけた。

あっ――

「委員長!？」

うそだ……委員長って、言っちゃ悪いけど頭はいいけど影薄くて、合コンにも誘われたことないはず。

「こ、このことは……誰にも言わないでください……。それでは……」

委員長はそそくさと玄関へ向かった。

「委員長、楽譜……行っちゃった……」

どうしよう、誰にも言わなくて言われたから、学校ではわ
たせないし・・・

また、弾いてる事あるかなあ。

これが、僕と委員長の関係を、大幅に破壊したんだ。

第1楽章『フルートの『朝』』

『この事は……誰にも言わないでください……』

委員長は、僕にそういつて出て行っちゃった。

どうしてだろう……ピアノ、かっこいいのに……。

「楽譜……何の曲？」

僕は委員長が忘れていった楽譜を見た。

「グリーグの朝か……僕も吹いてたっけな。」

僕は小学校の時に、フルートを吹いていた。

だけど、みんなに「女の子みたい」って冷やかされて、やめちゃったんだ。

僕はなんだかその気になって、押入れに押し込んでおいたフルートを引っ張り出した。

「こんなに小さかったっけ……」

僕が大きくなったからか、フルートがやけに小さく見えた。

そして、そつと口を近づけて、『朝』を奏でていた。

「あら？」

夕食の準備をしていたお母さんが、僕が吹いていることに気付いて、1度手を止める。

「あの子がフルートを吹くなんて、何年ぶりかしらね。」

「似合ってたのに、勿体無いよね。」

お姉ちゃんとお母さんは意気投合したかのように、二人して僕のフルートを聞いていた。

……翌日……

「おはよう。」

「お、おはよっ！まこ。」

そう、僕の名前は山下^{ヤマシタ} 真実^{マコト}。通称、まこ。

「今日も小さいなあ。」

がしがしと頭を振り回してくるこの男は、友達^{ナガタ}の永田 弘毅^{コウキ}。同じ中学だったんだ。

ちなみに、偶然か、僕と同じ小学校の人は、学年に1人もいないんだ。

ちよつと、ラッキーだよな。

「なあ、まこ。その包み、なんだよ。」

あつ、委員長の楽譜・・・返さないかね。

「これ、委員長のなんだ。昨日、忘れてっちゃったから。」

「ふん。」

「委員長。」

「あ・・・山下君。おはようございます。」

「お、おはよう。あの・・・これ・・・」

「何ですか？」

委員長は包みから楽譜を取り出して、はっとしたようにすぐに閉まった。

当然、弘毅は訝しげな目で見ていたけど、そんなに知られたくないのかな。

「あ、ありがとうございます。」

「いい曲ですね。」

「えっ!？」

僕が耳元で小さく囁くと、委員長は本当にびっくりしたような顔で僕の顔を見ていた。

そして、少し悩んだ風な表情をして、僕の手を握った。

「え？」

「今日も来ていただけませんか？」

「別に、構わないけど・・・。」

「・・・よかった・・・では、放課後。」

チャイムが鳴って、僕と弘毅は自分の席に戻った。
弘毅は僕の後ろの席で、いっつも話しかけてくる。
「なあなあ。」

「何？」

「あいつと、何かあったのか？」

「別に、なんもないよ。」

「何もなかったらそうはならないって。」

「本当にないんだって。」

「ならいいけど。変わってるよなあ、ナラザキ 榎崎 キョウヤ 鏡夜って。」

ナラザキ 榎崎 キョウヤ 鏡夜・・・学級委員長。

同じ学校の人が、いないらしい。何でも、高校だけ東京なんだって。
僕は、委員長が何者でも構わなかった。

ただ、あのピアノがもう一度聞きたかったんだ。

第2楽章『ピアノの『朝』』

・・・放課後・・・

僕は、委員長に言われたとおり、音楽室に来ていた。

これは内緒だけど、実はフルートも持ってきてるんだ。

小学校の時のだから、少し小さいけど。

「すみません、お待たせしましたか？」

「ううん。そんなに待ってないよ。それに、委員長、委員会でしょう？」

「でも、呼び出したのは僕ですから。」

「気にしないでいいって。」

委員長は、ほんとに些細なことでも、すごい謝ってくるんだ。そりゃもう、びっくりするくらい。

「それで、用事って何？」

「僕、ピアノ全然上手く弾けなくて・・・アドバイスを頂けないかと。」

「え？すごい上手じゃん。僕なんかがアドバイスなんて出来ないよ。」

「とりあえず、聞いてみてください。」

そういつて、委員長はグリーグ作曲の『朝』を弾き始めた。

「どうでしょう。」

「どうでしょうって言われてもなあ。」

コメントの仕様がないう・・・。

だって、こういっちゃ悪いけど、ほんとに・・・下手なんだ。和音も少し違うし、リズム感も悪い。

僕のフルートの方が、もう少し上手いと思う。

「委員長、この前は・・・もうちょっとうまくなかった？」

「ですよね・・・昔からそうなんです。」
「へ？」

意味がわからなくて、僕は変な声を出してしまった。

っていうか・・・昔からって・・・何？

「二重人格なんです。」

「にじゅうじんかく？」

「はい。眼鏡を外すと、性格も技能も全く反対になってしまつて。」

「へーそうなんだ。ね、外してみて！」

「だ、ダメです！」

「何で？」

「山下君に何かしてしまうかもしれないので・・・」

「何かって？いいじゃん、外しちゃえ！」

僕は半ば無理矢理委員長の眼鏡を外した。

すると、委員長はいきなり髪型をバサツと崩して、椅子に腰掛けた。そして、ピアノを弾き始めた。

・・・かあっこいい・・・。

弾き終わつた委員長は、ふうつと息をついて、僕をぎろつと睨んだ。
めがね外した方が、よっぽどもてると思うんだけどな。

「おい、お前。」

「な、何！？」

「カバンの中に入ってるモンは、何だ？」

「え？教科書とノートと・・・」

「んなこと聞いてんじゃねえよ。楽器、入ってんだろ？」

「な、何で分かつたの！？」

「バーカ、勘だ。」

え？勘？勘ですか？っていうかそれで当てるつてのも、すごくない！？

な、何なんですか？この人。いきなりかっこよくなつちやったりし

て。

「ふ、フルート……」

「フルートか……お前、『朝』、吹けるか？」

「ん、まあ、少しは。」

「よし。俺に合わせて吹け。」

「な、な、な、何で!？」

「面白そうだからに決まってるだろ？」

委員長（裏？）に合わせるのは、結構大変だった。

プロに勝るとも劣らない実力のピアノと、何年間も吹いていなかったフルート。

僕はため息しか出なかった。

「お前、いい音を吹く。」

「全然、ダメダメだよ。」

「そういうことじゃねえよ。確かにお前は練習不足で、音もたじたじだ。だがな、音は澄んでいた。音楽に一番大切なのは、そういうことだろ？」

なんだか僕はその言葉が凄く嬉しかったんだ。

もう一度……フルートを吹こうかと僕を彷彿とさせてくれた。

第3楽章　委員長の複雑

『お前、いい音を吹く』

エコーがかかったかのように、僕の頭では何度も聞こえていた。にやっと顔の筋肉が緩み、怪しげな顔を浮べていた。

「きもい。」

「え？何か言った？」

「ねえ、最近思っただけど、あんたってホモ？」

「へ？」

「どーして、男子校帰りにそんなにやにやしてるわけ？」

この「にや」の理由を聞かれて、僕はたじたじとした。なんて説明すればいい？

委員長にフルート褒められて、嬉しくってニヤニヤ？

それじゃ、ホモですっていつてるようなものじゃ……。

「べ、別に……。」

「怪しい。」

「彼女でも出来たの？真実したら、全然女の子連れてこないんだもの。」

そうなんだ。僕は、生まれてこの方彼女を作ったことがないんだ。

「かっこいい」って言われたことが、人生の中で一度もない。

可愛い、とかなら何回もあるけど、男のプライドが、褒め言葉として取っちゃいけないって言ってる気がするんだ。

「ねえ、お母さん。」

「何？」

「僕……またフルートやろうかな。」

「「えっ！？」」

お姉ちゃんとお母さんが声をそろえて、驚いていた。

そりゃ、いきなりだったからびっくりするだらうけどさ、そこまで

になる？普通。

「お母さんもいいと思うけど・・・」

「あんだ、バカにされるからやめたんじゃないっけ？」

「うん。まあ、それはそうなんだけど。ちよっと、いいことがあつてね。」

「いい事って何よ？」

「実は・・・」

ここでやっと僕は気付いた。

危ない！危うくここで言ってしまうところだ。

「ぴ、ピアノをやってる友達が、バカにされてないからっ・・・かな。」

「ふん。」

お姉ちゃんはしっくりしない、って顔で見てくる。

何なんだよ、僕ってそんなに顔に出やすいのかな・・・。

「いいわよ。フルート、新しいの買ってあげる。」

「ほんと!？」

「音楽教室の先生にも、伝えて置いてあげるわね。」

「ありがとう！お母さん。」

「お母さんも、真実のフルート、好きだったから、嬉しいわ。よかった。」

僕はそつと胸を撫で下ろした。

これで、委員長にまた褒めてもらえるかな・・・。
って、何考えてるの!？僕!!

・・・翌日・・・

「まーこー。」

「あ、おはよう。弘毅。」

「はよ。聞いたぜ、乙さん^{イッ}から。」

乙は、僕のお姉ちゃんの名前。

つて、聞いたって……何を？

「お前、フルート始めるんだって？」

「げ。」

「んだよ、げってのは。」

「だって……誰にも知られなくなかったんだ。」

僕は、じつと弘毅を見つめた。

すると、はあっとため息をついて、弘毅が俺の頭をぐりぐりと動かす。

「お前のそれって、わざと？」

「ふえ？何が？」

「もういい。あ、それと、さっき委員長がお前のこと探してたぜ？」

「ほんと？何だろ。」

「委員長、僕のこと探してたって。」

「昨日のことなんですが……」

昨日……僕にとっては、本当に幸せな時間だったよなあ。

「山下君に、何かしませんでしたか？」

「え？」

「いえ、私が気付いた時には、すでに家の前だったので。」

「あ、ああ。別に、何もなかったよ。それより、今日も放課後、あいてる？」

「え、ええ。」

「よかった。今日も、音楽室で会おうよ。僕、委員長のピアノ、好きだな。」

僕はにこやかに言うと、委員長は複雑そうな顔になった。

僕は、察した。あれは、委員長であって、委員長でないんだもんね。「ご、ごめん。でも、委員長と音楽について話せると、僕も楽しい。」

「まあ、いいですけど。でも……」
「でも？」

「今度こそ手を出すんじゃないかと、心配で。」
手を出す？

僕にフルート教えてくれるとか、そういうことなのかな。
別に、それならそれで構わないんだけど……。

「え？僕は嬉しいよ？」

「はっ？」

「何か、僕変なこといった？」

「いえ……そういうご趣味なら……。」

「ごしゅみ？」

そして、後から弘毅にこっさり聞いて、やっと「手を出す」の意味を知ったんだ。

そう考えると、僕、凄いこと言っちゃってたんだなあ。

そりゃ、委員長もびっくりするよね。

第4楽章　指と舌の使い方

僕が音楽室の扉を開けると、そこからはもうピアノの音が聞こえていた。

指の動きが見えない・・・早いなあ。

指が取れちゃうんじゃないか、って思うほどに、委員長の指は動き回っていた。

弾き終わったようで、委員長はぐったりとピアノに倒れた。

「すごい。」

「何がだ？」

「何がって・・・委員長がだよ。僕だったら、こんなに指動かせないもん。」

「鍛えたからなあ。あらゆる方法で。」

「あらゆる方法・・・？」

委員長はにやっと唇の端を吊り上げた。

「ちなみに、舌も器用だ。」

「へえ。でもさ、舌なんて鍛えたって、意味ないじゃん。」

「役立つぞ？いろいろと。」

「いろいろ・・・？」

裏委員長の言葉には、必ず何か含みがあるんだ。

僕がどうしてもわからないって思っても、絶対に教えてくれないし。

「そういえば、さっき弾いてた曲の曲名は？」

「ベートーヴェン『ピアノソナタ『月光』』だ。聞いたことないか？」

「うーん、僕、ピアノあんまり詳しくないんだよね。」

僕の答えを聞こうともせず、楽譜をぺらぺらとめくり始める委員長。

「ねえ、ちよつと聞いている？」

「聞いてない。」

何なんだよ！と、言ってしまうところだった。

いや、言つてよかつたかも知れない・・・けど、裏だとはいえ委員長に言うのはなんか・・・ねえ。

でも、聞いておいてさあ・・・それはないんじゃないの！

「もういいっ！」

「・・・教えてやろうか？」

「え！？」

「指と舌の・・・鍛え方と、その利用方法を、さ。」

「いや、別に対して興味ないし。」

ぱつと立ったと思ったら、委員長は僕の髪の毛を指先で弄り始めた。くすぐつたくて、追い返そうとすると・・・あれ？びくともしない・・・。

委員長つて・・・こんなにいい体してたっけ？

つん、と僕の鼻先をつついて、くつと委員長は笑った。

「まだ、早いか。」

「な、何がだよー！」

「別に？」

「ふん、もういいよ！」

やっぱり、僕、委員長のこと結構好きかも。当然、友達として。ちよつと何考えているか分からなくなることもあるけど、一緒にいて楽しいし。

第5楽章　高鳴る鼓動

「伴奏？俺が？」

さて、この会話の詳細を説明しましょう。

実は僕、普通っていたフルートの塾、みたいところに行ったんだ。そうしたら、

『もうすぐコンクールがあるから、とりあえずそれに出てみたら？』
つていわれて、お母さんとかもなぜか賛成しちゃってて……。それで、いきなりコンクールに出ることになっちゃったんだ。

コンクールでは、必ず伴奏者が必要。

だけどだけど、僕はずっとフルートを吹いていなかったから、伴奏できる人なんて知らない。

そう、委員長以外、思い当たる人物がいなかった。

そして、裏委員長に頼んでみてるってわけ。

「ダメ？」

「曲によるな。何吹くんだ？」

「テレマンの幻想曲第10番。」

「やだ。」

「へ？」

「俺、テレマン嫌いなんだよ。」

「どうして？」

「どうしても。」

委員長は言い切った。そんなに、嫌いなのかなあ。

当時は、バツハよりも人気だったって言う人なのに。

「じゃあ、なんだったら弾いてくれる？」

「……『アンデルセン常動曲　フルートとピアノのためのカプリース』」

「む、む、む、無理だよっ！！あんな難しい曲、弾けるわけない！」
「それ以外、俺は弾かねえよ。」

「なんで!？」

「っていうか、弾く前から無理とか言うな。ほら、そこに楽譜あるし、譜読みくらいしてしろよ。」

「バサッ、と目の前におかれて、とりあえず譜面を見てみると……
(う、うわぁ……)」

目の前に広がる音符の羅列……見ているだけで目が回りそうなくらい。

絶対に弾けないと思う……ただでさえ、全然吹いてなかったし。
「さ、いつてみるか。」

腕を慣らし始めた委員長。

「む、無理だつてえ……」

「ものは試した。な？」

にこつと笑いかけられて、僕は反射的に顔を赤く染めた。
委員長つて、女の子にもてるだろうなあ……すっごいきれいな顔してるし。髪の毛もさつらさら。

羨ましい限りです……まったくもう。

僕と委員長は、息を吸うタイミングにあわせて、演奏し始めた。
僕は、途中で混乱し始めて、所々音を外したりして、ほんと、ボロボロだったんだけど、委員長は全然楽勝って顔で弾いている。
しかも、パーフェクト。

「お前、本当に何年も吹いてなかったんだよな？」

「う、うん……」

「それにしては、妙に上手いな。天才、ってやつか？」

「そ、それは委員長のことでしょ!」

「どっちのだから。」

委員長は、どれだけ勉強しているのかはわからないけどすごく頭もいい。

逆に裏になると、勉強はどうだか分からないけど、音楽センスとルックスはずば抜けている。

どっちも、僕にはかけている部分だ。

「はあ、委員長が羨ましいなあ。」

「俺だって、お前が羨ましいよ。」

「どうして？僕が持っていないもの、全部持ってるじゃん。」

「この体質、どうにかして欲しいもんだぜ？一つの体に2つの心。何て厄介なんだ。」

「そっか・・・そうだね。」

僕がずっと視線を下に向けると、委員長は僕の額をつんとつついて、問う。

「お前は、どうしてこんな俺を羨ましがるんだ？」

「そりゃあ、頭もいいし、ピアノもうまい。そんでもってルックスもいいし。」

「お前だって可愛いだろ。」

「僕はカッコイイって言われたいの！」

すると、高い身長を少しかがめて、僕の額に、キスをした。

「な、な、なっ・・・！！」

「お前は充分、かつこいいよ。」

そのままパタンと音楽室を出て行った委員長の背中を見ながら、僕は呆然と立っていた。

「い、今の・・・夢？ザッツ、ア、ドリーム？」

僕の鼓動は、ひどく高鳴っていた。

第6楽章　天才の音色

ぼー。

今の僕に、これほど適切な表現はないだろう。

「ねえ、ちよつと、まこ！聞いているの？」

正直言つて、聞いてない。

お姉ちゃんに話しかけられても、お母さんに話しかけられても、僕の耳には届いていなかった。

僕は、ふらふらと自分の部屋に向かった。

そして、おもむろにフルートを手に取る。

『お前は充分、かつこいいよ』

まるでエコーがかかったかのように、何度も同じ声が聞こえる。

そしてそのたびに、僕はぼつと顔を赤らめていた。

（もうやだっ！何にも考えたくないっ！）

僕は、楽譜を取り出して、吹き始めた。

頭の中で、まだ委員長の奏でたメロディが流れている。

（ああ・・・気持ちいいなあ・・・。）

「まこ・・・いつの間にあんな・・・。」

「何があの子を連れ戻したのかしらね。」

難曲で、しかも演奏二回目だというのに、僕は指は操られているかのように軽やかだった。

途中で僕は、考える事をやめた。

ただ、音を楽しんで吹くことにしたんだ。

「おはよつ、まこ！」

「おはよう、弘毅……ふああああ。」

「随分と眠そうだな。何してたわけ？」

「ちよつと、譜読みをね。」

「なんだか知らないけど、あんまり無理すんなよ？」

「うん、ありがと。」

本当に……眠い。

実は、昨日寝たの、3時くらいなんだ。

譜読みをしてたつてのは、嘘なんだけどね。

結局、考えていた事をなくそうと思ってフルートを吹いたんだけど、そのせいで昨日の出来事をものすごい勢いで思い出しちゃって……。

眠れなかったんだ。情けないっいたらありやしない。

「あ、あの……山下君。」

「委員長！おはよう。」

「コンクールでは、裏が弾くんですよね？」

「は、はい……そうだと思いますけど……。」

「だったら、気をつけたほうがいい。よく、いろいろぶち壊しますから。」

委員長は、最近やたらに暗い顔をしていると思う。

もしかして、もう1つの人格が表に出る事を恐れてる？

でも僕は、それも一つの個性だと思うんだけどなあ……甘すぎ？

放課後、僕が音楽室に行くと、委員長はもう眼鏡を装着していなかった。

「待たせちゃったかな。」

「お前は俺の彼女か。」

笑いながら突っ込まれて、ああ、そうか。とさりげなく納得していた。

僕たちは、普通の友達同士よりは絆が深い気がするんだ。

「それじゃ、早速やるか！」

「うんっ！」

委員長のピアノの音を聞くと、なんだか心が安らぐ。

でも、誰も委員長がピアノを弾けることなんて知らないんだよね。
なんだか、得した気分。

僕たちは、呼吸を合わせて演奏し始めた。

僕は本当に、必死で吹いていたから、委員長が時々こっちを見ていたなんて全く知らなかった。

「すごいな、一日で……完璧だ。」

「委員長なんて、一日もかからなかったじゃん。」

「そろそろ、委員長、なんてやめようぜ？な、まこ。」

「う……え、でも……」

僕は、何でかはわからないけど、かあっと耳まで赤くなっていた。

「でも、いいinchよ……」

「鏡夜……ほら、言ってみるよ。」

「きよ……鏡……夜……？」

「そうそう。って、何で赤くなるんだよ。」

顔をデコピンされて、緊張の糸が少し切れた。

くすくすと笑う委員長……じゃない、鏡夜の顔は、いつにも増してきれいに見えた。

僕がぼーっと見とれていると、

「俺、そんなにきれい？」

「な、なん……っ！」

「本当に、家に置いておきてえよ。もちろん、人形で。」

「や、やめてよっ！」

「じゃあな。」

「また明日っ！」

僕と鏡夜は学校の前で別れた。

「なあ、委員長。」

『何ですか？』

「本当にいるんだな。天才、ってやつは。」

『あなたもその1人でしょう？』

「ははっ、違いねえ。」

これは、鏡夜の心の中の会話だ。

一つの体に、二つの心……。どれだけ大変なものなのか、僕には計り知れなかった。

第7楽章　コンクールの日

そして、やってきましたコンクール当日。

僕はあんまり重要視してなかったけど、やっぱり出るからにはいい成績とりたいよね。

「おはよう。」

現在、リハーサル真つ最中。

家からスーツというかタキシードでくるのはやっぱり恥ずかしいから、現場の更衣室に着替え終わったところ。

「おはよう。・・・フルートの手入れ、しておけよ。」

何年ぶりなのかは知らないけど、鏡夜もこの格好には流石になれならしい。

でも・・・似合いすぎ・・・。

いつも顔にかかっている髪の毛をあげたくらいで、あとは服装の力だというのに、ものすごくカッコイイ。

いつよりも増して。

これじゃ、どっちのコンクールかわかんないよね。

「何？」

「いやあ、カッコイイと思って。・・・っ！」

何僕普通にいつてんだろう。

「そりゃ、どうも。そういうお前も、そうとう似合ってるぜ？七五三みたいで。」

「何だよ！それ！」

「まこ。」

「な、何？」

「頑張ろうな。」

「当然！」

「・・・14番。アンデルセン作曲。常動曲 フルーツとピアノのためのカプリース。演奏者・山下 真実。伴奏者・檜崎 鏡夜。」

「・・・ドキドキドキ・・・」

「さ、さ、さ、さあ！出番だよ！」

「緊張しすぎだ。」

「こ、こういう時って！！手のひらに入って三回書いて飲むといいって言うよね！」

「そんなの聞かよ、さ、行くぞ。」

その頃、会場では。

「檜崎 鏡夜とは、まさかあの少年ではありませんか！？」

「でも、彼はもうピアノをやめたと聞いておりましたが。」

「もし本人だとしたら、一体なぜ・・・」

「10年前に・・・『天才少年』の称号を得たあの子なのか・・・！？」

拍手の波に押されながら、僕はステージに進んだ。

「お前なら、大丈夫だ。」

「な、な、な、何で？」

「俺が、天才、と認めた唯一の存在だから、かな。」

「よ、余裕だね・・・」

僕は、小さく会釈して、鏡夜と呼吸を合わせて、演奏し始めた。

そつだ、勝ち負けなんて、所詮ゲームの景品みたいなもんじゃん。

肝心なのは、自分がどう楽しんだか、だよな。

音が、僕と鏡夜を優しく包み込んでくれる。

（・・・楽しい・・・）

「これは・・・すばらしいっ・・・」

「プロの私たちも、顔負けですわね。」

「やはり、ピアノは、あの少年でしたか。」

「でも、フルートの子もすばらしいわ。この曲を、ここまで吹きこなせるなんて。」

僕は、意識が飛んでいってしまいそうくらい緊張していて、回りに目が行かなかった。

吹き終わっても、僕はほとんどめけの殻といった状態で、拍手喝さいの中でブラボーの声が響いたのが、耳に入らなかった。

「あ……」

会場から控え室に戻った時、がくつと僕は崩れ落ちた。

「よくやった。今までで、一番かもしれない。」

「ほ、ほんと……?」

「ああ。コンクールでブラボーコールが出るなんてな。」

「ブラボー?」

「気付かなかったのか? お前、ほんと、かつこいいわ。」

くしゃくしゃと頭を撫でられて、せっかく整った髪が台無しになった。

「ご褒美、やるよ。」

「え、何? ……」

そのとき、僕は何が起こったのか、よく理解できなかった。顔が、吐息が近い。

唇に、柔らかい感触が当たる。

これは……何?

「そこまで赤くなるなよ。」

「な、な、なななな、なあ! ?」

「な、じゃわかんねえよ。」

僕が顔を真っ赤にして飛び退くと、クスクス笑いながら、髪の毛を下ろしていた。

「何すんのさ! ?」

「何って・・・キス。」

「や、やめてよ・・・もう・・・。」

少し間が開いて、鏡夜はまた僕の頭に手を乗せた。

「やれる事は全部やった。そうだろ？」

「うんっ！」

この時僕は、数秒前に起こった事を、脳内から抹消して、鏡夜とともに、結果を待ちわびていた。

努力の結果が、よりよいものであることを、心から願いながら。

第8楽章　誰の實力

そして、ついに、ついに、ついに！！

けーかはっぴょー！！

なんて・・・ハイテンションでいられるはずもなかった。

普通、こんなときは緊張して何も手につかない状態だろう。

まあ、僕の隣で口笛吹いている人は別だろうけど。

「はあ・・・」

「ん？どうした？ため息なんてついて。」

「だってえ・・・」

「だってまあさってもねえよ。ため息つくと、幸せが逃げるって言うぜ？」

「ため息くらい自由につかせてよ。」

ため息をつくと幸せが逃げる、というのが、実際にそうなった人を見た事はない。

それに、ため息なんて、しょっちゅうつくもんだらう？

『候補者の皆さんは、ステージ裏へお越してください。』

キター（電。男風。）

ど、ど、ど、どうしよう・・・ステージ裏ってどこだったけか！？

「ほれ、行くぞ。」

「何でそんなに余裕なんだよ！」

「だって、俺自信あるし。だって、俺様だぞ？」

「ああ。そうっすねえ。」

「ったく、むかつくなあ。」

むかつくのはあんさんでっしゃる。

・・・ドキドキドキ・・・

第二のドキドキ波襲来。

演奏する前よりは少しいいけど、やっぱり緊張するよ。

口から心臓飛び出しそう。

つて、僕結構グロいこと考えてない!?

『・・・それでは、優秀賞。』

い、いつの間に準優勝!？もう呼ばれてないし・・・だめだったんだなあ・・・

『24番。片瀬^{カタセ}直くん^{ナオ}。伴奏者、片瀬^{シスカ}静くん。ヴィニヤフスキ
『華麗なるポロネーズ第1番二長調』。』

すつこいなあ。優秀賞かあ。

つて、同じ顔だよ、2人とも。双子なんだなあ。

キラキラ光るチョコレート色の瞳。瞳の色より少し淡い髪は肩まで伸びている。

一言で言うつと、クリソツ美男子兄弟。

ああ・・・自分のに集中(というより緊張)しすぎて、他の人の聞いてなかった・・・。

不覚だなあ・・・。鏡夜は何してるのかなあ、と。

「まあ、あいつら上手かったしな。」

聞いてたんかい!!・・・なんか、実力の差?余裕の差?つて
いうのを感じるなあ。やけに。

『それでは最後となりました、最優秀賞の発表に移ります。』

「はあ・・・。」

気がつくつと、僕はまたため息をついていた。どこでたまるのかなあ、
この息つて。肺?

『最優秀賞は・・・14番。山下 真実くん。伴奏者、檜崎 鏡夜
くん。アンデルセン『常動曲 フルートとピアノのためのカプリース』。』

・・・ワァアアア・・・

沸きあがる歓声。

僕は普通に拍手をしようとしていた。

だけど、隣の鏡夜にとん、と背中を押されて怪訝そうな目をむけると、

「最優秀賞、俺らだってさ。」

「んなわけない。」

タモさん風に答えただけ、ふと気がつくとも視線は僕たちに集まっている。

「早く行くぞ。」

「え・・・だって・・・タモさんが・・・」

「いいから、いいから。」

俺は混乱してまた意識が吹っ飛びそうになっていた。

だって、最優秀賞だよ！？僕の実力とは思えない。鏡夜の実力？うん、それなら頷ける。

「おめでとう。」

「あ、ありがとうございます。」

「ぷっ・・・」

「・・・笑うなよ。」

僕たちは控え室に戻って服を着替えていた。

そしてまた僕は呆然としていて、服を裏返しに着たりしていた。

「おーい、意識あるか？」

「ない。」

「あんじゃなか。お前、最優秀賞だぞ？一番だぞ？喜ばないのか？」

「鏡夜は嬉しそうだね。それ、きっと二セモノだよ。」

「はあ!？」

「もしくは、鏡夜の実力。だって、僕全然そんな無理だモン。」

「本物だし、お前の実力だって。このコンクール、クラシック会において著名人ばかりが集まっているし、テレビカメラも回っている。参加者のほとんどが留学経験者だぞ？その中でお前は最優秀賞をもらったんだ。すごいことだって。」

「……………」

僕は少し黙って考えた。

あれ？これってちよつとしたコンクールじゃなかったっけ？

どつりで観客動員数、多いと思っただよな。

って、待て待て。留学？そんなの、僕、一回もしたことないよ？っ

てことはやつぱり……

「鏡夜がすごいからだね。」

「違うって。しつこい奴だな！お前、いい加減に素直に喜べよ。多

分、俺がいなくてもまこは最優秀行っただと思っよ？」

「だ、だって……………」

「もつとポジティブに喜べ！はい、命令！喜べ！！」

「わ、わーい……………」

「てめえ……………」

信じろっていわれたって、到底信じられないよ。

そんな口論をしているとき、部屋がノックされた。

扉を開けると……………

……………バシバシバシバシバシ……………

「最優秀賞をとった感想は！」

「どちらに留学なされていたんですか！？」

「伴奏者とはどのような関係で！？」

これが……………マスコミの恐怖。

そんなすつこいコンクールだったの？あ、そういえばさっき、テレ

ビカメラもまわってるって言ってたっけ。

「あ、あの……………」

「はいはい、みなさんどいてどいて。」

「俺たち話があるんだよ、こいつらに。」

2人組みが部屋に乱入してきて、そのまま扉をバーン！

閉め切っちゃったよ、鍵しちゃったよ。

「はっじめまして、片瀬 直です。」

「初めまして、弟の静です。」

「あ、えーと、どうも。」

2人は同じ顔をしているけど、中身は全然違うんだなあ。

確か、バイオリンを弾いていた方が直くんで、ピアノが静くんだよね。

すると2人はずいっと顔を近づけてきて

「ねえねえ！どこに留学してたの？」

「どこの高校に入ってるの？」

マスコミとあんまり代わらないなあ。

「留学・・・してないよ・・・？」

「「ええっ！？」」

「それどころか、はじめたのつい最近だよな。」

「「ええー！？」」

「再開したのは、だけどね。」

そりゃ、驚くよね。

「やっぱり、僕が最優秀もらったのって、間違いなんじゃないかなあ。」

「うっん、違うよ。自信もって！音ののびもよかったし、間違いもなかった。」弟。

「うん。あんな難しい曲が吹けるなんて、違う楽器だけど感動っ！」兄。

なんか、ほんとに僕がやったんだって実感がわいてきた。

「僕・・・喜んでいいのかな・・・」

「「「当然っ！」」」

そして、僕と鏡夜と直と静（呼び捨てでいいって言われた）は部屋で散々騒いだ後、コンクール会場前で別れた。

僕の家の前にはマスコミが張っていて、なんとか家の中に入れたけど、警察に通報してやろうかとも考えた。

お母さんもお姉ちゃんもかなり喜んでいたけど、僕にはちょっとした不安があった。

それは、学校。

いままで隠し続けてきたフルートの存在がばれたら、またバカにされないかなあ。

ちよつとしたっていうか、結構多大な不安であつたりするんだ。

第9楽章　こいつの手はフルートを吹く手

そして、コンクールの翌日。

一言で言うところ、大変で、今まで生きてきた中で1番驚いた回数が多い日だった。

驚き1

朝僕はいつもどおりの時間に学校に行つたんだ。

でも、バスに乗り込むや否や、周りの人の視線を釘付けにし、学校に着いたら着いたで校門の前にはマスコミの列。もちろん、質問の嵐。

教室に行くと、テレビだけじゃなく新聞にまで載つちやつて一躍有名人になった僕は、クラスメイトや後輩、先輩にまで押し寄せられる始末。

当然、鏡夜の周りにも人は集まっていたけど、眼鏡装着中の『委員長モード』だったから、応対に困っているみたいだった。

「よっ、まこ。お前、すげえな。ブランク吹っ飛ばして。」

「ま、まあね……。」

「まこにそんな才能があったとは……。」

「いや、あれは奇蹟みたいなもんだから。」

「どんな練習したんだ？あ、の、檜崎と。」

「聞かないで……もう、くたきたんだよ……。」

もちろん、マスコミにはほとんどの事を喋ってないけど、質問攻めはもう真つ平だ。

驚き2

まあ、2番目はそこまで驚くものでもないんだけどね。

「あの・・・山下くん・・・」

「あ、鏡夜。どうしたの？」

「すみません、またあいつがやっちゃったでしょう・・・」

「やっちゃった？」

すると、鏡夜はほんの少し頬を赤らめて、僕の耳元で囁いた。

「ほ、ほら・・・あの、キス・・・とか・・・」

「あ、ああっ！いいよ、気にしないで。僕も気にしないことにしてるし。」

「そうですか。なら、いいんですけど。」

本当は、少し気になっていたんだ。

というより、なんか恥ずかしくってさ・・・夜も思い出しちゃって大変だったんだ・・・。

驚き

「みんなあー、席つけー。」

担任が教室に入ってくる。

僕と委員長に群れていた人たちが一気に引き剥がれ、僕は安堵の息をついた。

「今日は転校生を紹介するぞー。よし、はいつて来い。」

え！？いきなり！？

転校生が来る時とかって、前日に前フリをしたりするモンじゃないの？

そして、その『転校生』が来た瞬間、僕と、眼鏡を吹くために外していた委員長はかなり驚いた。

「「まあこー、きよおーやあー！」」

「「直！？静！？」」

子供っぽく僕と鏡夜の名前を呼んで教室に堂々と入ってきた片瀬兄弟。

しかも、同じクラスに双子？

「片瀬 直です、よろしくっ！」

「片瀬 静です。どうぞ、よろしく。」

相変わらず、似てるんだか似てないんだかわからない双子だなあ・
・。

「それにしても、めずらしいね。双子と違って、違うクラスに分けられるものじゃないの？」

「あれ？まこ、言ってなかったっけ？」

「うち、お金だけはあるから。——って、あれ？鏡夜は？」

「多分、委員会だと思うよ。」

「「委員会！」？」

「あれ？聞いてなかった？鏡夜、ウチのクラスの委員長だよ？」

「「はあ！？」」

そっか。直と静は『天才』の方の鏡夜にしか会ってないから驚いてるんだ。

・・・・確かに、あのキャラで委員長って言うのは、ちょっとね・
・。

驚き4

そして、本日はお待ちかね、理科の実験の日。

今日は、ガスバーナーと酸素&水素を用いた少し間違えると大爆発になりかねない危険な実験。

でも、ちゃんと手順を守れば大丈夫。先生もいるしね。

理科の班では、弘毅とも、鏡夜とも、直&静とも違う班なんだ。

「フルートって、やっぱり難しいんだろ？」

「しっかし、あの檜崎がピアノマンだったなんてなあ。」

「俺なんてマスコミに話し聞かせてくれて言われたぜ。」

やっぱりこの話題ですか・・・・。

っていうか、このほかに話題はないんですか・・・・。

「で？山下、そのところはどつなんだ？つて、うおっ・・・」

僕に話を振った出席番号1番阿部くん。

少し動作をしたときにガスバーナーに制服を引っ掛けてしまった。
あれ？待てよ、その倒れる向きって・・・やばっ・・・

・・・ガタンッ・・・

酸素と水素のほうではなく、真つすぐに僕に向かって倒れた。

「熱っ！！」

僕は叫び声にも似た声を上げた。

手首を少し焼いてしまったかも知れない。

熱い・・・ジンジンする・・・

「まこっ！？」

机が近かった直と静がすぐに気付いて僕に駆け寄る。

「わ、悪い・・・」

「山下、大丈夫か？阿部っ！実験中は気をつけろといつも言っているだろう！」

「まこっ！！！！！」

眼鏡を投げ捨てて鏡夜が駆け寄る。

委員長モードではない。

「てんめえ・・・」

鏡夜の声のトーンが少しばかり低くなる。

唸る犬のような凄い形相で阿部くんを睨みつける。

「悪いですむと思つてんのか！？こいつのこの手は、フルートを吹く手なんだぞ！？演奏に支障をきたしたら、ただじゃ済ませねえからなっ！！」

一瞬の沈黙が理科室を流れた。

コレには流石に先生も硬直していた。

頭がよくて、静かな委員長が、ここまで荒れたんだ。びっくりするのわかる。

「鏡夜、落ち着いて。とりあえず、保健室に。」

「先生、俺たちも一緒に行ってきます。」

直と静のフォローでその場は落ち着いて、僕は保健室に行くことが出来た。

ただの火傷だし、傷跡も残りそうもないけど、今日は練習できなさそうだ。

「大丈夫か？」

「まこ、痛くない？」

「まこ、まだジンジンする？」

「まだちよつと痛いけど、大丈夫だよ。心配かけてごめんね？」

3人は同じような顔をしていた。

心から心配してくれているのが凄い伝わってきた。

そんなこんなで、本当にバタバタした一日だったんだ。

でも、今でもあの言葉を思い出すと、心があったかくなるんだ。

鏡夜が阿部くんに向かっていった言葉。

『こいつの手はフルートを吹く手』

鏡夜は、2重人格でも、自分も、委員長も大切に、一個人として扱ってきた。

だけど今度だけは、僕のために『委員長』を切り捨てたんだ。

そこまで大切に思ってくれているなんて……

なんだか、友達以上になっちゃった気分だなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1036b/>

その旋律に染めて

2010年10月13日06時42分発行